



# ひきこもり相談対応事例集

茨城県ひきこもり相談支援センター

# 目次

事例 1 相談から医療保護入院に繋がった事例

事例 2 不登校の事例

事例 3 自立に向けた支援

事例 4 精神疾患の疑いのある事例

事例 5 8050ケース

事例 6 家庭内暴力のある事例

事例 7 ひきこもりから福祉施設へ入所した事例

事例 8 相談訪問支援から治療に至った事例

事例 9 相談から医療保護入院に繋がった事例

事例 10 相談から専門学校入学に繋がった事例

# 1 相談から医療保護入院に繋がった事例

## フレーズ 1（不登校）

高校を卒業し、大学に進学するが、自分の志望する学校ではないため、入学して数ヶ月で行かなくなり以降、ひきこもり生活になった。

ホームページでセンターを知った母親から連絡があり、来所してもらうこととした。

[期間：3年]

[期間：4ヶ月]

## 対応 1（インテーク面接）

面接を実施する中で、本人が精神科病院の受診歴があることがわかったが、成育歴や本人の様子などから精神疾患の疑いは低いと判断し、一般的なひきこもりの対応方法を伝え、それを実践するよう助言した。

以降、定期的に電話にて状況確認を行い適宜必要な援助を行っていた。

（解説）

- ・一般的なひきこもり対応方法・・・働くこと、将来のことを話題にしない。家をその方にとっての安全地帯にする。お小遣いをあげる。生活態度に注意をしない等
- ・行政サービス・・・障害福祉系のサービス、自立訓練（生活訓練）、就労系

## フレーズ 2（様子の変化）

母親より本人の様子がおかしいとの連絡があり、本人と一緒に来所。

[期間：1ヶ月]

[期間：5ヶ月]

## 対応 2（精神科受診）

本人・母親を交えた面接で、統合失調症の陽性症状である妄想がみられたため、近隣の精神科病院を案内し、すぐに受診するように助言した。

精神科病院では、統合失調症と診断され、医療保護入院となった。

## フレーズ 3（退院）

病状が回復したことから、退院することとなり、月1ペースで定期的に外来を受診している。

病状については、落ち着いた様子である。

[期間：3ヶ月]

[期間：現在]

## 対応 3（行政サービスの利用）

退院後、行政サービスを利用しながら、社会復帰に向けて前進している。

（利用した行政サービス）

・相談支援事業所、地域活動センター、自立訓練事業所、就労継続支援 B 型事業所

## 2 不登校の事例

### フレーズ1（不登校）

A君は小学校5年生から学校への行き渋りが始まる。これを心配した父親は、学校に行かないとだめじゃないかと登校刺激をした結果、本格的な不登校に突入。中学校も数日登校したものの、不登校に。中学校2年生になり、高校進学をみすえて、母親からセンターに相談が入る。



[期間: 4年3ヶ月]

[期間: 3ヶ月]



### 対応1（電話相談）

センターでは、母親のご苦勞を慰め、電話相談から面談へと繋げ、面談を重ねていく段階で不登校よりものちの自立が大切であることを伝え、それに対するご理解を得るようになった。

### フレーズ2（様子の変化）

両親同伴で面談相談へ。



[期間: 3ヶ月]

[期間: 5ヶ月]



### 対応2（面談相談）

面談を重ね、A君がご家庭で安全に過ごせること、つまり登校刺激をしないこと、A君の部屋が安全基地になるようにすること等のご理解をいただき、お小遣いもあげるようになった。そして、A君はだんだん笑顔を取り戻すようになってきた。

### フレーズ3（進学相談）

中学3年生になり、進路のことは親側から話さないようにした結果、本人から高校に行こうと思うんだけどという相談が入る。



[期間: 6ヶ月]

[期間: 4ヶ月]



### 対応3（進学）

高校の情報を一緒に探し、県立のフレックススクールに入学となったことから相談終了。

# 3 自立に向けた支援

## フレーズ1 (本人の状況)

大学卒業後8年間ひきこもり状態。将来のことが心配と両親がセンター来所相談に見えた。大学時は、俺はどうせ受からないと、自ら就職支援を受けることを拒否。卒業後、ひきこもり状態になり現在に至る。

[期間: 8年]

[期間: 6ヶ月]

## 対応1 (ひきこもり状態の受入)

両親には、本人の心理状況を説明。外見上どう見えようと、本心は将来のことを悲観し、どう動いたらいいかわからず不安を抱えている。現在、親ができる事の一番は、家が彼の安全地帯になるようにすること。また、彼らは親に対する感謝の気持ちと共に、いつ見捨てられるのだろうという見捨てられ感を常時抱いていることも説明。腫物扱いするのではなく、今の状態を受容し、働くこと、将来のこと、親が死んだらどうするのとか等の言動を慎んでいただく。また、親の受容と見捨てられ感の低減の為に、お小遣いを決まった日にちに同じ金額を与えるようアドバイスしながら、面談が続く。

## フレーズ2 (サポステへのリファール)

サポステ支援のこともお伝えしながら、相談を継続。半年たち、母親が、本人の心理状態を理解したころ、母親同伴でサポステ来所を促す。結果、本人のサポステ来所へつながる。

[期間: 5ヶ月]

[期間: 6ヶ月]

## 対応2 (自動車免許の取得)

サポステ利用が始まり、サポステから車で1時間40分かかる所に住んでいるため、オンラインでの面談が始まる。すると、家でオンライン面談をしていると両親にそれを聞かれるのを嫌がり、外出してオンラインをしようとするが車の免許がない為、免許の取得を決意し取得。そうして、家の近くの公園からオンライン面談をするようになる。

## フレーズ3 (進学相談)

オンライン面談を続けていたら、携帯料金が高くなり、車の免許も取得したので、運転の練習をかねてサポステに通所ようになる。サポステスタッフから誘われ、2ヶ月間の集中訓練プログラムに参加するようになる。そのプログラムの職場体験を経験した事業所に、サポステスタッフが「もし、〇〇君が御社への就職を希望したら」と提案し、採用の内諾をえる。

[期間: 5ヶ月]

[期間: 5ヶ月]

## 対応3 (就職後のサポート)

集中訓練プログラム終了後、その事業所へ応募し、採用となり3か月間の使用期間を経て、正社員での採用となる。サポステは本人が希望すれば、就職後のサポートもしており、オンラインでのセミナー、面談に参加。仕事上の悩みごとに対応。(現在も支援継続中)

## 4 精神疾患の疑いのある事例

### フレーズ1（本人の状況）

以前経営した会社が倒産、離婚して子供をひきとった。会社勤めもしたが、長く続かず、いくつかのコンビニでの仕事もしたが、それも続かず、子どもの養育が困難になり、子どもは別れた母親のもとへ行くことになった。生活が困窮している様子を察した母親が同居を提案し、6年前から母親と二人暮らし。2、3年前から、大声を上げたり、台所でずっと立っていたりしていたが、数ヶ月前から、二階の自分の部屋で、大小の用便をするようになり、いくらトイレを使用してと言っても、下へ降りて来る事がなくなってしまった。食事は、母親が作って、2階にあげている。

[期間: 11年]

[期間: 6ヶ月]

### 対応1（相談へ）

母親が知人に今までの困りごとを相談。その相談を受けた知人が、茨城県ひきこもり相談支援センターに電話で相談をした。その後、母親とその知人とで来所相談に繋がる。相談を受けて、精神疾患の可能性を強く疑い、相談者さんの住居地を管轄する保健所へ連絡をし、相談者の近くの精神科の病院の情報を聞いた。そのうえで、相談者へ、今後の進み方のアドバイスをした。

### フレーズ2（他機関連携）

入院設備があり、親だけで診察が受けられる病院に向き、息子さんの状況を説明して、入院できるかどうかを聞き、入院できると医師から言われたら、次に病院のケースワーカーさんと入院できる日を打ち合わせして、入院日を決める。当事者に対しては、本人を病院への通院を説得できる人から、通院を促してもらう。本ケースでは、別居している弟がおり、その弟さんに入院日に病院へ同伴してもらった。

[期間: 3ヶ月]

[期間: 3ヶ月]

### 対応2（入院）

入院に関しては、弟さんに付き添われて通院をし、3ヶ月の入院となった。診断名は、統合失調症であった。入院の期間、とりたててトラブルもなく、服薬もしっかり行い、体調もかなりよくなった。

### フレーズ3（退院後の準備）

センターのアドバイスを受け、入院期間中に自治体の障害福祉課に事情を説明し、福祉サービスを受けられる体制を整え、相談支援事業所につなぎ、退院後の通所施設、住まいを探すこととなった。

[期間: 3ヶ月]

[期間: 5ヶ月]

### 対応3（退院後）

すぐにグループホームは見つからず、退院後は家に帰ることとなったが、服薬もしっかりしていて、体調の良さを継続。昼の活動場所として、地域活動センターを利用、その後自立訓練（生活訓練）のサービスがある福祉事業所に通所するようになった。数ヶ月して、グループホームが見つかり、そこでの暮らしが始まり、障害福祉課から繋がった社会福祉課での相談から生活保護がつけられることとなった。

# 5 8050ケース

## フレーズ1（本人の状況）

30代前半の頃までは、会社勤めをしていて特別問題もないように感じていた。

ある日から、突然会社に行かなくなり、会社の人々が家に来て、何か本人に謝罪をしていたようであった。その日を境に、家からでなくなった。パソコンの通信料が従量制であり、10万円近くなることが数カ月あり、けんかになったこともあった。父親が数年前に亡くなったが、その葬式にもでなかった。ひきこもり生活をしており、ほとんど母親とは会話もなく、食事も別々にとっている。生活費は、貯金と年金。自分が死んだら、この子はどうなるか心配で、死ぬに死ねない。

[期間: 20年]

[期間: (4年)]

## 対応1（相談から訪問へ）

10年ほど前に保健所に相談にいったが、本人を連れて来てくれとか、病院に相談に行ったらどうかとか、母親が思っている相談にならなかつたらしい。ここにも相談してもどうしようもないと思っているが、とりあえず相談に来た。

50代となると、何か特技でもないと働くのは難しいかもしれないとお伝えしたうえで、訪問支援の方針をお話しし、また、親の会の情報をお伝えした。

その後、親の会に欠かさず参加してくれるようになった。

## フレーズ2（訪問）

母親からの依頼で訪問支援が当事者56歳の時から始まった。

訪問支援は、本人に会うことを直接の目的とはせず、訪問者、ご家族の双方の安全を確保しながら、ゆっくり本人へのアプローチを行う。固定している家族関係にヒビを入れることを目的とする訪問である。

[期間: 4年]

[期間: 3ヶ月]

## 対応2（当事者との面談）

2か月おきに訪問し、母親に声掛けをしてもらい来なければそのまま帰るを4年間継続、その間ご家族にも変化があり妹さんがお母さんと当事者であるお兄さんをご自分の家に引き取ることとなった。これを機会に、当事者が60歳の時、はじめて会えることとなった。

当事者は、「俺、将来のことを考えるのは面倒くさい」

「あーあ、めんどくさい」との発言を繰り返した。

「よく、会ってくださいましたね。ありがとうございました。」だけで、面談を終えた。

## フレーズ3（一人暮らしの開始）

次の訪問時にも、会って下さり、こちらから、今後の状況の説明をした。数日してアパートを借りて、そこを拠点としてハローワーク等を利用し就労したいと、以前とはまったく違う口調で話してくれた。

母親にそのことを説明したら「うそだ、うそだ」信じられませんでした喜んでくれた。

2017年12月に長年のひきこもり生活から離れて、アパートでの生活が始まった。

[期間: 3ヶ月]

[期間: 5ヶ月]

## 対応3（生活保護受給）

ハローワークへの同行し、登録もしたが、かなりナーバスになっている様子なので、アパートに急いで帰った。

初めての一人暮らしが不安そうで、毎日電話があり、そのたびにアパートを訪ねた。知らない人がいる場所への恐怖感があるようで、ハローワーク一人で行ける状態ではないと判断し、精神科への通院を薦めた。通院の同行を提案したが、一人で行くことになった。うつと対人恐怖と診断され、服薬を開始した。直後、本人から数千円しかない、もう、母親からお金をもらいたくないという主訴があった。それを受けて、生活保護の受給となった。

# 6 家庭内暴力のある事例

## フレーズ1（本人の状況）

有名大学を4年時に中退し、ひきこもり状態に。当初は、何の問題も起こすこともなくひきこもっていた。ひきこもりが長くなり、親は他県の教育相談センターに相談に行っていた。そこでは、何ら解決に繋がらず行くのをやめた。こちらに相談に来る1年ほど前から家庭内暴力がひどくなり、色々なところに相談に行っている。ずっと家にいるばかりで外出しない孫を心配して、おじいちゃんが声掛けをして、外に連れ出したり、旅行に行く時に同行させたりしている。その時でも、ほとんど声をだすことがなかった。

[期間: 10年]

[期間: 2年]

## 対応1（相談から訪問へ）

ある講演会后、個別相談になった時、講演会では別々に座っていた方が二人で相談にみえた。お話をきくと、お子さんの家庭内暴力が酷い様子で、父親は気が狂ってるんだ、勝負してやみたいと言われ、母親は何か理由があるような気がする、ご夫婦の意見が食い違い、夫婦仲が悪くなった結果、講演を聞くにも一緒に座らなかったよう。お話をうかがい、まず、お小遣いをあげているかどうかを確認すると、あげていないということで、あげるよう提案。また、父親に対しては、家庭内暴力に対抗したら事件に発展することになるかもしれない。とにかく、逃げてほしいとアドバイス。

## フレーズ2（訪問）

小遣いは、しばらく置いてあるが、毎月とるようになった。数か月経過したが、相変わらず暴力は毎日ではないが続き、両親は、年よりもいるので大変疲弊している様子。訪問支援の方針を説明し、自宅への訪問を開始した。訪問4回目、2階で暮らす彼に下から声掛け。すると、上から彼が下りてきて、手振りで何か合図してくれた。外に行こうという意味だと理解し、外で待っていると彼ができたので、ファミレスでも行きますかと提案すると、了解を得た。

[期間: 5ヶ月]

[期間: 2年]

## 対応2（外出）

働かそうとか、無理に何かをさせようとしているわけではない、たまに逢ってくれたら嬉しいなと話した。彼からも家では話したくないと言うのでもしよかったらメルアドの交換をしてみたら外で会いませんかと提案。4週間に1回くらいメールをして、会う日を決め、一緒に食事をするようになった。そして、好きなものや食べ物を聞き出し、プラモデル屋、ラーメン店、本屋等も訪ねるようになった。そんなことを繰り返して生き帰りの車の中で色々な話をするようになった。その際に、家庭内暴力の話や彼の個人的な話には一切ふれないようにした。

## フレーズ3（一人暮らしの開始）

2年が経過した後、彼から突然「うちの両親はきちがいだと思うんですよ」「俺のことを見張っているみたいなんです。小学校のころからそうなんです」との話。その為、家を出た方がいいんじゃないかと提案したが下を向いてしまった。生活費を払えるあてもなく、かといって働くのもハードルが高い。そこで、家から出てアパートを借り2年間を目標として自立することを考えないか？その間の金銭的援助の件を僕が親と交渉するからと提案した。2年ですか、2年あれば自立できますかね？と尋ねられたので大丈夫サポートするからと話した（金銭的援助の件は、事前に親と相談済）

[期間: 1年6ヶ月]

[期間: フレーズ3と同時期]

## 対応3（就職）

結果、アパートを借りて家を出ることになった。就労し、自立することが本人の望みであったので、サポステに繋ぎ、支援を受けることとなった。積極的に各種のセミナー、講座やハローワークの職業訓練講座にも参加したりした。その後、ポリテクセンターに入学し、正社員での就職がきまった。



## 7 ひきこもりから福祉施設へ入所した事例

### フレーズ1（本人の状況）

中学校時代から不登校、昼夜逆転で家から出ない。食事も家族とはとらず、会話もほとんどない状態。中学校時代には、特にいじめとかにあった様子がなく両親は登校刺激をしていたが、本などを読んで登校刺激は効果的でないと思わなくなった。スクールカウンセラーに定期的に相談していたが、特段なんの進展もなく現在に至る。

[期間: 4年]

[期間: 2年4ヶ月]

### 対応1（相談へ）

母親が親の会に出席、今まで、スクールカウンセラー以外には子供の悩みを話してこなかったのが会に参加してたくさん親の話を聞いて悩んでいるのは自分だけじゃないんだと実感ができ心が軽くなったと言っていた。アドバイスを受けてお小遣いをやり始めそのままの彼を肯定するよう努力をしていった。やがて、家族と食事と一緒にとるようになり会話も少しづつ増えていった。

### フレーズ2（本人との面談）

ひきこもり支援フォーラムに母親に連れられて本人も参加。（母親が、ひきこもり支援フォーラムで、元当事者が話をするから行って見ないと誘ったら、行くと言ったそう。）フォーラム終了後、スタッフと話をして、スタッフによくこの会場に来ることができたね、凄い凄いと褒められた。更にスタッフからサポステの案内を受けサポステへの通所が始まった。

[期間: 1ヶ月]

[期間: 2年]

### 対応2（一般就労支援）

母親の送り迎えをしてもらいながら、サポステへの通所が始まった。対人接触の少ない講座からスタートし徐々に色々な講座、セミナーを受講できるようになってきた。サポステの集中訓練プログラムへの参加し、職場体験等も経験してきたが、自分で一般就労は難しいことを受容し、スタッフのアドバイスをうけて、精神科への通院も始まった。

### フレーズ3（福祉的就労支援）

福祉施設を見学、通所の意思を固めるようになってきた。ただ、本人の住居地からの通所には、公共交通機関がなく本人は車の免許がない為、母親の送り迎えで通所することとなったが、母親の用事のある時は通所を休むこととなった。車の免許取得に関してもいくつかの自動車教習所と配慮をさせていただきよう連携をとっていたので本人にそのことを告げると免許取得の意思を持ち始めた。

[期間: 6ヶ月]

[現在]

### 対応3（通所）

自動車教習所に通い始めて、車の免許を取得し、自分で運転して福祉施設に通所するようになった。通所して、1年安定して通所し通院も安定している。

## 8 相談訪問支援から治療に至った事例

### フレーズ1（精神疾患の疑い）

はこの紹介で母親より相談。電話相談での一言目は「施設に入れてくれるところを紹介してくれると聞いた」との言葉。状況を確認すると市役所への相談、移送業者を使い病院受診もさせたが変化なし。自宅での状況は不眠・発狂・不衛生。状況把握のため母親に了承を得て市役所・保健センターへ連絡し状況確認を行うことができた。

[期間: 15年]

[期間: 1ヶ月]

### 対応1（母親へアプローチ）

母親は「もう面倒を見切れないので施設に入れてほしい」の一点張りであったので、センター側は当事者の希望なく入院治療や施設入所をさせることはないと伝えた。また「自宅に来て本人の状況を改善するよう注意してほしい」との希望もされたが、まずは当事者との信頼関係を作ることを第一目標としていることを伝え、センターの方針に納得できなければ訪問支援ができないことを理解してもらった。市役所とも打ち合わせ、訪問の次にある通所施設利用を視野に入れながら訪問支援決定。

### フレーズ2（身体疾患治療へ）

当事者は身体疾患を患っていたため、「あなたの体が心配なので、（身体疾患についての）病院に行って治療してほしいのだけれどどうだろう？」と提案したところ了承してくれた。病院にも同行できることを伝えたが「自分で予約して行きたい」との希望であったので、訪問時に予約受診状況を確認し続けたところ、3か月後に受診に繋がった。

[期間: 5ヶ月]

[期間: 5ヶ月]

### 対応2（母親面談の継続）

訪問毎に母親は施設や生活に関する不満を口にしながら、傾聴を続けるうちに母親の口調も穏やかになっていった。当事者の好物を聞いていたので母親に準備をお願いしたり、当事者へのアプローチ方法についてレクチャーを行った。母親も訪問がスタートしてからの当事者の変化に気が付き始めたので、母親の協力的な態度や努力を誉め続けた。

### フレーズ3（自立に向けた支援）

訪問を続けるうちに担当者と近所の散歩に出れるようになった。別居している父や姉と外食する予定ができたようで、「姉と一緒に洋服を買いに行きました」と新しい服に着替えた当事者がいた。まだまだ不衛生な部分は残っているが、就労意欲も出てきたので就労移行支援サービスの概要を伝えたところ、当事者もサービス利用を望んでくれた。

[期間: 3ヶ月]

[現在]

### 対応3（市町村窓口との連携）

母親は行政窓口にも相談していたため、母親に了承を得たうえで市との情報共有を行った。今後、就労支援サービスを利用するうえでの情報提供をお願いし今後は訪問支援への連携などを行っていく予定である。対象者は急激な変化はとても苦手なので時間をかけ丁寧に支援を続け最終的に就労支援サービスに結び付けたいと考えている。

## 9 相談から医療保護入院に繋がった事例

### フレーズ1（激務）

大学卒業後、出版会社に就職するが激務が続く精神状態が不安定になり退職。通院するも一向に良くなる気配はなく、ひきこもる。家ではインターネットを利用し母親のカードで大量の酒類・食料品などの購入を繰り返していた。自室は購入した商品が開封されることなく置かれているものが多くあったが、家族の入室は頑なに拒んでいた。弟もひきこもり。

[期間：6年]

[期間：1ヶ月]

### 対応1（インテーク面接）

母親が来所しこれまでの経緯を話した。現状困っていることは、母親の現金やクレジットカードを盗み大量の商品を買ってしまう事、同居の妹との関係性が悪いことなど。統合失調症の診断を受けており服薬もしていたが服薬を嫌がった時に医師から「ご飯に混ぜて飲ませなさい」と言われ実行したところ、母親の作る食事には一切口を付けなくなってしまった。

### フレーズ2（家出）

面談を続けているうちに、母子間の関係性は少しだけ良くなっていったようであったが、突然家出をしまい1ヶ月ほど行方不明となった。家に戻ってくると状態が以前より悪化しているようであったので、保護入院を提案。最初は入院に抵抗があるようであったが、当事者が幻聴幻視を訴えたために、両親で病院へ連れていき入院となる。

[期間：3ヶ月]

[期間：5ヶ月]

### 対応2（入院）

入院治療開始直後は混乱することが多かったが、徐々に落ち着きを取り戻していった。同居の弟は不仲であった姉が不在のため、落ち着いて生活ができるようになった。なかなか部屋から出てこなかった弟も部屋から出てくるが多くなり、姉が入院2か月目になると自分で仕事を見つけ面接まで行くようになったとの報告を受けた。

### フレーズ3（退院）

3ヶ月の入院期間が終わり、退院の日程が決まったが、家族は病院側の訪問支援を快く思っていないようであったので、継続的な服薬の重要性・病院側と繋がり続けることの重要性などを伝えた。入院期間中は穏やかに暮らすことができていたので、この生活を維持するためにも、しっかりと医療機関との連携を取り続けるようアドバイスを行った。

[期間：4ヶ月]

[現在]

### 対応3（面談継続中）

インテーク面談から1年経ったときに、振り返りを行ったところ母親自身も短期間での変化に驚いていた。「ここまでこれたのはセンターのおかげです」とおっしゃったが、そうではなく、母親があきらめず通い続けてくれた結果であること、またこれまでの頑張りが現在の状況を生み出していることを伝えた。母親自身が自分を認め褒めることの重要性を理解してもらった。

## 10 相談から専門学校入学に繋がった事例

### フレーズ1（不登校）

小学校時代にイジメにあい不登校、中学校、高校にも行かずひきこもった。自宅からは一切、外に出ることはなく、髪、爪は伸び放題、風呂にも入らず、母親より運ばれてきた食事を自室で食べる生活を送っていた。母親は、相談機関を訪ね歩いて、一時は寮生の施設入所まで提案したが、結果としてひきこもりの程度がひどくなる経緯もあった。ゲームが好きで、1日のほとんどの時間をゲームとアニメに費やしていたがひきこもり支援フォーラムの開催時に母親と一緒にフォーラムに参加しサポステブースへ来所した。

[期間: 7年]

[期間: 1年]

### 対応1（インテーク面接）

ブースに来てくれた母親と当事者に勇気を出して来所してくれたことに感謝を伝え、サポステの支援内容について説明を行った。キャリアカウンセリングとは仕事だけではなく、今後どのように生きていくかを一緒に考えていく場所であること、当事者の意思に沿わない支援はしないことを約束し、次回の面談の約束を行った。

### フレーズ2（サポステ）

最初はうつむき顔だけの態度であったが、うなずいてくれることに感謝を伝え当事者の好きなゲームやアニメの話をしつづつ聞き出していった。

最初はかすかに聞き取れるかどうかくらいの声であったが、徐々にはっきりした声でしゃべってくれるようになり、面談を一年間続ける中で一緒に笑えるようになり、信頼関係を気付くことができた。

[期間: 1年]

[期間: 2年2ヶ月]

### 対応2（集中訓練）

支援がスタートして4年が過ぎたころに、サポステで行われている2か月間の集中訓練に参加を打診してみると、返事をもらえるまでにしばらくかかってしまったが参加の意思を示してくれた。集中訓練で様々な人生を送ってきた他者との交流をしっかりと持てたことで、自分のこれまでの人生も振り返ることができ、リセットすることができたようである。

### フレーズ3（再出発）

集中訓練が終わるころには、次の目標を立てることが出来るようになっており、自身の今後の人生に向けて何が必要であるかを支援者と一緒に考えることができるようになっていた。家族とも連携も密であったため今後の進路に関しての金銭的補助も可能であることを把握できていたので、当事者が興味を持っている専門学校への進学を提案し快諾した。

[期間: 3ヶ月]

[期間: 現在]

### 対応3（専門学校進学へ）

専門学校のオープンキャンパスに行き、自らの意思で進学を決意した。専門学校の入試対策を一緒に行い入学に至った。入学後は定期的に面談を行い学校での出来事や悩みを話してもらい一緒に解決策を考え対策を練った。またバイトをスタートさせ家族から出してもらった専門学校の費用も少しずつ返済予定であることも話してくれた。